

「タイ・フィールド調査参加報告書」

京都大学経済学部 4年
山本翔太

これまでの学生生活ではインターンシップやボランティアといった形式での海外渡航のみを経験しており、アカデミックな視点からの渡航は今回が初めてでした。今回の派遣を通して、卒業までの半年で短期留学に参加できないか考えるようになりました。今回京大から派遣された学生は留学生が大多数で、国際色豊かなメンバーに囲まれて活動することができたのが刺激になったと思います。産官学連携といえはありきたりな表現ですが、国際社会におけるアクターの多様化、特に合法・非合法を問わない多国籍ビジネスの拡大を鑑みるに、学生がこうした領域に関心を持ち続けることや市民社会組織によるガバナンスの重要性を改めて認識することができました。

私にとってタイを訪問するのは初めてであり、東南アジアへ渡航するのは2年ぶりでした。渡航前は書籍やインターネット、大学での勉強の中で、タイを発展している国、東南アジアの優等生として考えていました。これまで自分が渡航したマニラなどと比べると確かに治安の面などで不安になるシーンは全くなく、日常生活は快適でした。ただ、バンコクでは物乞いの方をよく見かけ、格差を示すジニ係数の大きさを思い出したりもしました。豊かな国といったようなマクロな視点でものを見たとき、だれが豊かなのか、といったミクロな視点が欠けることはよくあるので実体験を通して見直しができたのは有益だったと思います。

英語が公用語であるフィリピンからの留学生が多く、タイに渡航したのにフェイスブックでフィリピン人の友達が増えたのはどこかおもしろみを感じるものでした。

現地ではアジア地域における持続可能な開発を一つのテーマとして、多様な機関、ロケーションを訪問することができました。特に国連機関である UNIDO や FAO への訪問は学部生である自分にとっては貴重な機会だったと思います。各機関ではそれぞれの扱う国内・国際問題についてレクチャーを受け、その後学生からの質問を受け付けるといった形をとっており、タイ、ASEAN における社会経済問題に対する理解を深めることができました。また、バンコクのタマサート大学では院生を中心とした学生がプレゼンとディスカッションをする機会が与えられ、学部生の自分も英語でプレゼンをしました。留学している院生の方々はさすがの内容で、研究意義、リサーチメソッド、予想される結果など、進行中の研究にもかかわらず体系だったプレゼンがなされており、自分とのレベルの違いに触れることができました。

就活中に応募し、渡航するころには就職先は決まっていたのですが、国際協力にかかわる職務に就くにあたり、今回の経験が何かと役に立つのではないかと期待しています。もともと進学は一切考えていませんでしたが、院生に囲まれてすごし、退職されてから大学院に進学された方もおり、何年先になるかわかりませんが、大学院への進学が自分の進路の選択肢の一つとなりました。